# 紀曲清

下

へ13
4287
2

京都帝国大学図書

# 礼拙稿下

みかゝれたる篇のゝ毎ふつゞまもさまをゝ義文れ有りて
たりとせんぎなれぱよりと深理とぱりたるまつゞ。
教ふゝ〳〵てこゝろせゃんさん前生乃えい不同なれだ
行〳〵もゞみ不同なり。ぱゝ〳〵いみゝことゝゝ。隨他意の
説すゝてゝれハ光ぱ玉玻璃手拭れでゝたとへだ。幼稚
なりのぱ天れ月とゝゝせんと指とさゝておれゝそ
月ゝとゝゝだ乃あゝりと月とありひてぱるもなり。
みをゝ〳〵かゝゝきハ指とみるもあり。西ゝゝんゝ

日謙藏書

428
2
〈91-1032〉

幼稚なれば、ただちに指をとのそひて天の月をみるべ
きをもて法もみかれば、おろかなる人は理教の
ふかく義をとり深理をもて経教の勝劣と一大
事のゆへをいまだあきらめず仏意をもとめて悟
道をもとめるなり。幼稚如来の指の
ごとくして天の月をとんさをもてごとくなり。経教の
勝劣のきはをもとめ一心の月をもとめ。
されば祖師は教外別伝不立文字。心心相心見性
成仏とのべ給へり　同日秘蔵の教のかはり別
よりてこれまつぐんりとかの深理なり。

信ずべきひとをもとめられけれ
ば　答曰。秘蔵のかはり
はるかなり。大類は下劣の人情
あり。何ぞかはるべきや。大悟あり。小類は下劣の小悟
ひとあり。ちりをもつて人はよ
なり。類はさとりの津をこそ深理と得る
別傳とは如来の秘傳也　拘伽羅の云日我法得
道夜至涅槃夜不説一字　又縁覚経曰仏久羅教如標
月指　又大梵天王問仏決疑経曰梵王至霊山会場以
金色波羅華献仏請仏為群生説法世尊登座招
華示衆勝青蓮目人天萬億悉皆困措猶金色頭陀

破顔微咲世尊言吾有正法眼蔵涅槃妙心實相微
妙法門不立文字教外別傳分付摩訶迦葉となり。
ゆえに禅宗明らめんで祖師のもとをおしずと
やされけるとで　問曰教外別伝不立文字宗旨なるとで
うんで教文と用て。禅宗と云のや。不立文字ゆえとで
うへ相違あり　答曰別伝として不立文字なりと云ども
教文とうして宗旨とおしうすたりあり　問曰教
ありとことがりたまつえ自語相違へばそんかうや。
おろかなりく教外別伝の中人〳〵教ゆえ相違へば
ようにくとも法華ゆえ法華ゆえ迷ひ

法華ゆえ。楞伽経ゆえ覚経ゆえ問佛経等意と者
うしてこうせやうさん。ゆえ楞伽ゆえ一字不説とも
彼経乃等ゆえ言常不云大會菩薩問世尊言佛得
道夜至涅槃夜一字不説定意如何佛答曰因二法故
作如是説二法者本住法自證法也本住法者前佛所説
真如理也自證法者今佛所説実相理也　天台大師
止観五彼経を釈して釈しまふ。二法ともに。実相宗旨乃
理なり。言説の乃ぶ所重なれば。法華といへく字
も説とと云答ゆえ言ゆえ言ゆえ理ゆえ得ぐうきと
歎ゆえとなり。彼声色近名顕実相極理日

ハ何拓の深理なりとも。説だにとく物なり。相付二法
得名自證法者 教者我而説法云心也。本住法者 諸佛
所説法云心也。まへの所説なれば。ゆとるべきなり
説のまことの理はあらためざれば。住とハ云なり
不説とハいへどとて。始終乃。不説よりハ。あらずあらざれ。
絶言歎なり。又獨覺經修多羅經ハ月をさし指乃
ことと云文乃意ハ修多羅の經ハ理をあらはす。
ばゆへ。教とをして理をあらはすべきなり。教。指ハ月と
ちがのことなりばゆへ。指をとりて月をあらはすべきなり
と。説法なり。教ふをして理をあらはすばかりに。



教とをしへ。指ハ月をさんで。速ハ指をとる也
とのことなり。教ハ。能文乃意をとり。知をしまへ
三歳幼童ハ。指をとりて月を示ハ。あをのひて
月をとるなり。指をとりつる月とせるものハ。天地なる
人まれ乃中にハ。あるべからざるなり。
況ハ見性得悟ハ果へなり。御ども經巻讀誦のみ
ざりまへ。未除三納受ある。ハ三國乃佛へハ。言語道
三世諸佛。十方ハ神明も。指をとりて月とせるあやま
りとをしへ。大梵天王問佛決疑經ハ。元大義乃
縁ハ。まことれど。開心抄云。大梵天王問佛決疑經者

祖師引くゞ傳縁よのせゞ。近代禅者。自縁の中
よゞ文をひく。謀説類あり。あへく依用ふたゝもを矣已上
彼経もゞ傳縁の中にかんへゞ實よ信用とべゝ。
み達磨大師血脉論。二宣論すゝ。の経をひいて経
とせゞたゝひ。傳縁よ載ゞといふゝも。ゝ乃理分
はゝゝゞ信用ゝ。ふゝりもゝゞ教外別伝と
のべゝりんを解ゝ。ゝと親する。軌則あり。仏教の外。
全伝へ。ゝ道はゝ。何れ伝べき義ゝてう。教外
別伝ゝんや類ゝきを用べゝ。ゝ見ゝ成論
ゝり凡人師の中に自己の所見と著述せゝと

像入りて仏祖と備るゝ。ゝ見ゝ伝
経おゝゝ。同仏決疑経もみおゝゝゝ。ゝと軌ひ
べゝ教外別伝とのへゝれを。一代伝経の心ゝ。
さゝいなり。異教ゝ。類ゝ。ゝは仏類ゝ
きとのゝひて文義合て。明経をたりゝ。
ゝゝりんゝ。同日。教ゝれせんさゝもあ。
理ゝ無相の法ゝりなんゝ。ゝ見ゝ伝へん。
云ゝ見相著也有相ゝ。ゝりて無相ゝゝ。
言教ゝ学ゝ。理ゝゝりんゝとりふ面とりて
ゝよ形相を用ゝて。ゝうゝゝゝゝ

蓋云。理ハ言相也。言とりて言あらはすべからず。理ハ相
なり。心とりて心くれなゐなんぞ以心傳心
といひ給ふや　同云。理ハ言相なりと云へども心の
眞會をうるゆへ故ゆゑ以心傳心といへり
微妙教ハ月を標指のごとく宣説とりて小児に
とたぶくるがごとし。禪んぞ教ゆ執ふ禪と
求ざるや。月ゑ他の寶とうばへて自身殘の
ものなり。愚なりく　蓋云教之外に理なしとなり
めすは大成あやまりなり。有相とをるれて言相
云。有相即言相。言相即有相なれば法法實相也

世俗乃文字なを眞理なりといふんや。如來之金
言とや。文字即解脫也。故文の外ふ理なし。一句句。
言言皆實相也。文非文非文非不文三諦即是之妙
理也故一句一偈皆當作佛觀。有相を捨て霜
よいくくんとおりめすは愚成なるも。俗聲色近
名言相至極理名顯躰有德　以狀乃意況合是
古今に契なるハいふ。ふそれとハ云りなすを言
ありかくふあれとも證。扶桑字なへばのまり
あを經教を捨ふとなへば。業障を布施を
ふ出あれも時よあれてすてくふ教を為用

ていとし。愚人ともふ珠勝よりとれり。米粮をとる法師。
加様のるりが。禅法とやしりのみくいりや。成ぶつき
乃愚必者へ。ぱっきさまへかぐくしてそうへ宗義をとろん
をなれ目ハ。禅ハ元教外別傳よりさ〳〵向上之一路。千
聖不傳大道ありしい上慢ゑ檀那之請よりもく
時ハ佛教を讀誦ゑ書寫ゑ創時懺法をとりつ〳〵
よせり。教外別傳之所ゑいつまのところよあるや。
不立文字之宗義なり〳〵ぐんそゑ魂をとるもふ
よをとりんでハ下火念誦祭文等をこざんして文意を
たくさんゑ法ふや。我家之教外別傳之禅

風へ〳〵ぐんそをとれりとさ〳〵ひ法ふ佛教を檀と
よ行ゑ法ふや赤裏〳〵彼ぐんれをとくて今時の
なまくゑ男女ゑ我しそ悟道之者ゑといて。
佛祖をとりつめ佛教をあざりゑ人師乃作り
ゑ語録をあをとひて元ふりて元明を新發ゑ。
生死の縛を切て中来ゑ面目ふりゑ〳〵さへ
つり技ゑ法ゑ煩悩の酒を飲ゑ。男女弟
ふさいりさまり書て意乳佛教をやとしをを。
ゑ実をやうけゑ還て悪ゑをいくせり。後ふく
我も人も煩悩の酒をすぐ。意乳をへぐぬ乃

万も観念をかるゆゑに仏祖と
ゆゑて煩悩は薬とさとるべし是好良薬之妙法
とはうり人自病は煩悩と療治いとすると形象
ゆゑ鳥鼠乃まのといとせで心身とのこと二諦者
かを愚人のまゝ孫といとせで心身とそこと迷我
ときは散乱乃意みく観念ごとといとすゝ
鳥の鼠乃まの孫病者達者人のさいとといとこと
とくなれど必隔獄とるべし又今時乃禅者愚
者しこそたりれは必いんとに仏神とろ
こゝあ仏教と捨てと仏祖とりごめ教とこのみ

中者いは愚なりとあさり我身と慢し我人衆
者と切て悟道とうりと旬歌心愚心執心執着
祖人へかとうとてこれとは心は仏祖とのごめ
心と教とよこ修行法心は祖とれ法ふと乃へり
加程のなど話則とぬさこはとりなみこと
又観念悟道ゆゑ中なるなりや未審なる
何なるとこと我因ふ乃えで智恵に及ことはも
過去未来自因果なきりのなとこたりひ法なる
なれ眼明よりてもと乃へごゆゑ毎一言
乃者文字とと人知とで下乃の碁とちぬき

もと見知ぬ愚如商人はじとさかり面り沖を見知
ぬ所に茅ぶきに付て毒ぶすに付て毒しも先一ツ
見可見可對色色は一切の法色事相は見ゆる通
二つは不可見有對色色は迷の眼にて分ぬ所にて
而こも神妙きくとみるのみ沉香麝香分
能りの通りの其角は風のどの神なりこも躰を
とゝ見ども見ぬ所なきものとわれ人ぬ戸漏
たてやうに白色風色内へ入れ躰をの影
を三つは不可見見を對色色は玉其内の水央入
水石の内の央皷を皷鐘其内の巻入の内其



流水の内其氷入は薄氷其内の板葉菓子菓子
をもこゝ内人の玉の内より央入を儀よ
地水をこるやうにおりひ地石の内より央を打
ぐこゝみゝ入れ儀よ儀よ為をうれおりひ
皷を皷鐘をこゝをこゝ時落ちこゝ内ぬ
服よなりやと汁おりひ寒水とうれた
をこゝと汁おりひ風来時流とうれた風のこゝ
なりと汁おりひ結ふ愚如なる中より水其内
流と如べき性水と如べき性を入寒来こゝ
風来るこゝ何こゝ流こゝ氷こゝ如べ皷

大鐘の内外をうちうるべき性をハ伝のとうち
うりとゝ也若あやべ〻ずゝ又第六の中有と
枝葉ふ花菓云ふ也云ふ枝葉花菓あ第六
ゝ全ゝ〻べ〻ずゝ皆悪真如実相の相を離也
古奇ふ真如とゝ〻ん〻ぬとゝ〻てさすがゝ〻ゝ中ゝも
きゝぬとゝ〻び。縁如ゝ〻ふ一切之法を来
年有と三諦実相ゝ〻て〻ゝ〻ゝ不滅不来
不去不来之法也此神ゝ双非双照之徳と
て一度ハあゝ〻ゝ〻ゝ二度ハかゝ〻ゝ〻ゝ我ふ心と同ゝ
なり年有と双非双照之徳あれど一度ハ伝ゝ〻ゝ

一度ハかゝ〻ゝ〻ゝ〻

備づ。やとい。ぬし中に。一人の男いるを。此寺門
者とをりて。生みをに備べしといふ。をりとをえて
をりて。備ゝり。こゝ後寶の山。行とする。深山
より迷て。行づゝ方をしらず。帰べき方をしらず。
又六日迷廻。名迷うへて。後より餓死や。橋を渡り
見ハ何くゝと。行也。行ふ。
行相也。こゝ友の事に。備。規亟也。行ふ。經教と案
問者として。座禪修行。菩提之山よりをりて。成佛の。
案ずべきとゝろ。數外別傳。不立文字なゝ
いふて。經教をもて。義と。座禪修行之報とい。

邪路より入。後より。隨獄。とるたたへ。行ふ。をり。山。
書百喩經。みへ。をり。山經文。をりて。本法。當
今之修行之相。をるに。完。符。合。ごゝ
ゝ。明鏡之像。を。写。似。ふ。似。を。人。
ゝ。ゝ。ゝ。

如来の家に上がるを捨て念仏の
心をなすべしと仏法の
と専に学ぶべしと
それ法いかにしてか
の見ふさんぞ
さそうべしと
きれ書みとたぶし
いとすべて座禅観念
ようねるも他仏
ものあるべし

実教あり小乗あり頓あり漸あり不
定あり秘密あり蓮華蔵あり
なり仏ども全ども法華一乗大日経第二
華厳経第三の法花経も
大日経とたのもなすべし大日経と今身
秘密の仏教よりこれ
仏の教法なれば大日経と法花経と金剛
師の法なれば大日経と法花経と金剛
と故に真言得果即身成仏とかくし
と修行べし　ようかくの上臈のあるひるあ

佛とやうなる。衆生なれば。我身にて。実也。
法報應の三身如来とやうなる。
あり。三身如来といへば。一つなる。毗盧遮那如来。
天竺の語。法身如来とやうなる。法
の理諦を指てやうなる。二つなる。盧遮那如来。天竺
の語。方便にて。報身如来とやうなる。色心智德を指
てやうなる。三つなる。釈迦牟尼佛。陀天竺の語。方
ゆくゆく。為身如来とやうなる。一切の衆
生に。教化を施す。友為身如来とやうなる。色心相応
三身如来とやうなる。三佛かぐんに。

一佛の上ゆくゆく。三つの功能とやうなる。天竺の語。
毗盧遮那とやうなる。相不可得之理諦を指てやう
なれば。このひっちやうに。法は全きなり。
少法法は應身と報身との両様。大日經と。毗
盧遮那佛の法法なり。
なる。大日經并に三身如来とやうなる。
ようさん。為身ふ付て。勝為身。劣為身として。二義
のりゑ報身に付て。自受用報身。他受用報身。
二義なる。法身ふ付て。理法身。智法身として二義
なる。上此と。六身門之配立とやうなる。為法身

如来ふけて六種の分別をべし。一つは性徳の
法身如来也。則本覚の佛也。前生れ一念迷
の中に実相どさんに二つは法佛修徳の真如と
いふて法身如来と構せり。これは修徳の真如
理あり。智ありて雜用なく二義とす。如如に境は
理法身如如の惠は智法身也。前は合なく三種
とも。つは界外執立に真之妙覚と号して
法身如来とも法性土の佛ともゆへ也。此は色
義立ては三身の中の毗盧遮那は異也。の法
性土法性所感よりの分とそんじ。三の義なり。

あるひは法身後身の名なりこそ義和ぬべし。又は
はは応身の佛と。家は即法身如来とす。色法
華開顕の妙義三佛と開会なり即円佛なり
ゆへなり。彼女佛とかりて微妙浄法身具相三
十二等といる色あり。六つは大日如来也。真言
家は大日法身は色相荘厳の。如来なれば理智の
法身ふあるず。三界は円色界の摩醯修羅天宮
ふて成道之理ゆへ界内より也は佛なれば。
法性土は三の妙覚法身ふあるず。又相多は身の
佛なれば。文殊は法身は開會の義ふなり。

衆門あり世尊仏身にして身量莊嚴巍々堂々たり
藏通兩佛の及ぶ所にあらず。而大會のしるしを
法華の教他乃如来の家他受用身の所説なり
例せば新訳の花嚴經は花嚴の義をとるべし
那如来と云ふ事は報身の他受用
なりまつたく云べし。新訳乃ち言語のひろき
那も他受用なり。○大日經第三巻
他も現身云ひる事や那世尊復説一切大會告説
金剛秘密三昔及諸支仏法華
言門説行云々此文と見るに法華八部の

法を法華大小權實世尊説法華の法華の法身の説なり
なりとひろき事なり。法華の法身
と云ふ。系譜又説へし。新訳の花嚴經より釋迦
と毗盧遮那仏と号す。淨飯大王摩那夫人
をひろき事なり。世尊なりと云ふ人と
ふ云ふ人と云ふ人と
同なるごとし。新譯の説の如来よりの説なり
如来よりの他受用乃ち二義とおもひ同なるなり
といふ。量にむかつて月とせるごとし。新訳
の言語説なり。惟て盧舎那とひろき

ふ法身とゝなり。正法身まさに法法身とゝなるべし。
法法身は法性不生也。法身とゝ
あらず。実相真如乃至涅槃の真理
八義は不生あらんやから。ゆゑに大師の
天よ云法定不法相違二義を化定法也。法身とゝ
宣て法法のおもてさす類なり。新人舊人面訳よ
三身乃立不立名別ぬ。盧舎那仏のお渡み
あり。新理まゝ。法とやゝかれとおさんに。仏二身とゝ
三身と。建立せんで。舊人の理まゝ。盧舎那と同お
とて。三身は相命ぬ。新人舊人の面渡面見



とも。三身ぬ来と。建立せると。寛意家頂の源義と
ゆべし。それまゝ如體の平等る一性ゆゑ。三身
別の法やゝなと一よあさらぬ。いろ〳〵ゆゑ
とや。體性三ゝ別りとゝ。いんども。徳用とゝんどれ
で。必三つ乃至。性徳三佛。法〳〵恵ゝ也。
本有は三徳三佛。迷よゝ。ゆゑ。報慣業苦の三
乃やされ。性徳の三法。徳よゝ。迷中乃
三乃悟よゝ。所よ。仏果也。必三身ゝ〳〵。
三身ぬ所程性の三乃三徳三佛やこのゆへ小蘇
天の理ぬ三身と。建立せるとゝ。法〳〵

さなり。過て一切の法は非無と云。一境
一切境なれば。非無境なるべし。法身一切
法身なるゆへに。一智一切智なれば法無智なり
なるべし。一法身一切一切非身なればゆへに。一用
一切用なれば。報法用なるべし。一無化身。
一切無化身なるゆへに。一宣一切宣なるがゆへに
偏中空なるべし。一偏一切偏なれば。空
中偏なるべしなり。一中一切中なれば。偏
空中なるべしなり。故に心三観と俱に一體
三身と俱に。法報の三身は平等一體なり。

皆妙皆因。一相一味平等平等。故正法の法と平
等大智之妙法蓮華とのたまへり。蔵の法界の
為んぞるがごとく。理をもつて法界に為んぞ。理の法界
よりなんぞがごとく。智をもつて法界に為んぞ。智の
法界にあんぞがごとく。用をもつて法界に為んぞ。
三身一體なり。一相一味の中に常恒に相即し。蓋
蓋一合なり。即ち是なり。故平等と言。妙
法と云。惠日大聖と言。惠日は暗をのぞく。その三身
優劣なしと。平等にあらず。獨妙なり。惠
日大聖にあらず。唯大日法身と尺するにすぎず。

秋迦牟尼也。秋迦牟尼即大日は身にして一切處
遍人一行ふ中来常住。妙法蓮華経やりたるべん
ち。皆小乗の義也。法華経まこと実教。拾之。なにあら
さるかりかれのくるとしくは合点のうべし。
相人としては想別とのるものとくくしるけるる
別あるべ。見をたくざれば。第一にあやまり也
先天下玉泉。完全。所思とたるるる。或は
仰の恩親の恩とたるるるる。八日月孝天伝祢
伝伝八伝恩と知るるるる。故よ孝病とけ孝雖
よおひやるるるる。天たりも恩るる。此

りもあるべ。拭たりしひるるるる。秋久。二宮孝
天八ひるひて。まりて八。天下泰平。国土安穏と
いのり。沙弥。父母。或八一門朋友。一切乃
衆生。二世安穏といのりたてまつる。必祢陀仏
八。威恵。まて。我身も安穏なるなり。
たる。可。ものづくしたる。法華経
月。也。行りのずるも。ものくるる。今
の人。孝。孝。孝

ひとり牛と思ひ、仏と思ひ、仏と思へば仏は現前し、
衆生と思へば衆生は現前す。現前とは別にあらず。
ものなり。されば此心、仏になるなり。
法華経二乗作仏喩品云、今此三界皆是我有、其中衆
生悉是吾子、而今此處多諸患難、唯我一人
能為救護。○法華経大論云、十方恒河三千大
千国土名為一佛国、此中更無余佛、實一釈迦
牟尼佛、上経海のごとくなれども、一滴海水を摂
盡せり。釈尊ばかりの法華経、一切
諸仏の経中、王家第一の法華経也

相承ばかりつき、道師まる。釈尊の金言のごとくひろめ
給ふ人と。釈尊ばかりなり。
人の願者、経とは世間の願者、
業師、経とは世間の願者、
仏の経、経とは世間のときのみやくれりひ。
おりひ、日経とは世間のときの法ふやうに
ひとひとも、相承ばかりなり。
よ。一偈一句も、余仏乃至
ゆるるもと、法華経人間
よ相承ばかりなり。釈尊の法華経王と定まれ。

摩那支人と。毋とこそ。二子音年ありて。
生れ給ひぬ。ひゞ九の比年。出家あり。三十の
年より。法を修行へて。漸々。悟成正覺の
新仏也。教をるより。ひろめ給ふ。いつれ仏の
世よりも。法をとゝのへて。法とこそ
終行へとまうされど。若云教そもうりせんよりも世
たのふ仏。云教也。御ぐそ。法をもて。教をもて
なり。こゝ。法華経ハ。ふ。ぬ。なり。金経ハ金
るなれど。法華ハ加なり。さ。法ハ
て。ゆ。せ。ん。ゆ。ち。ふ。ぬ。ゆ。ち。ふ。ぬ。ゆ。ち。ふ。ぬ

の義を行ひ。方等・般若・弾訶とかうむり。般若時の
教迦葉・大乗の法門と。弟子同連等に教授して。
られと。他方より来たる。菩薩に授て。おしへの
伝付られ入て。仏のおしへ。こゝとをけども。
一分も。我得分とは。行ずして。教附賊
とは。かくのごとく。四十余年の間。二乗は根
性。たゞ。ゆへよ。不融とは。
拘尼年。二十二の時。前生の根性。絶対なる
法花経を。流布ひろめ。一切衆生を。成仏得脱せ
めんゆへよ。法花経を。根性の。融とは。なり

才二は。化道乃拾。法花経也。不拾とは。
余経也。三乗云。余教。当機。益物。不説如来施設
意。此経。明。設教元始。実。三乗。の機。通教
通教の機。それ。ゆへ。
先。法華。一実。入。
と。流行。
より。
む。ゆへよ。余経
也。拾。法花経。
一乗。信受。

以法と行て世界と世界と世界の下種の
ものへよ化度の始終と
名つけり也第三に佛
不遠近共に釈迦牟尼
成道始成正覚なりしかば
壽量品現乃て五百塵点之前
仏と成して本果妙之成道と
已来と説て本果と利益
仏果と始てのられ方便
現乃大士久遠教化
仏

仏寿之遠近を
自我得佛来所經諸劫数無量百千万億載阿僧祇
常説法教化無数億衆生令入於佛道今来無量劫
此文全経文也一代聖教之全言也加様のもの
ゝ〻ぞ人〻金剛と法華経を同ものなりと
又様なる金仏と同ものなりと
通ぬ様なれども一文不通なりしも
根性融不融化道始終不始終仏寿遠不遠
近とゝるを知て他宗門と云て
実とせけり人〻男女とも

人得聞別と分くこと能はざるなり。たとひ経
法華などのべたまへりとも。なほ仏のまことを分かつ
ことあたはず。法華序分無量義経説法の表。
以仏眼観一切諸法不可宣説所以者何知諸衆生
性欲不同性欲不同種種説法種種説法以方便力
四十餘年未顕真実是故衆生得道差別不得疾
成無上菩提。法華一巻方便品云十方仏土中唯有
一乗法無二亦無三除仏方便説乃至唯此一事実餘二則非真
因七巻薬草喩品云譬如大雲雨於一切草木
法華経の法華経はまことなれども方便なり。

十喩とのたまへり。法華経は海のごとし。二つは法華経は須弥山のごとし。三つは法華経は月天子のごとし。四つは法華経は日天子のごとし。五つは法華経は能一切衆生の苦を抜く。六つは法華経は転輪聖王のごとし。七つは法華経は帝釈天王のごとし。八つは法華経は大梵天王のごとし。九つは法華経は一切の凡夫人のごとし。九つは法華経は墨摩訶薩のごとし。

変図薛文仏号はこれ十よ。佛諸法の
王なりごとくに法華経もまたかくのごとし。諸経
の中に王也と。経法華也同八巻普賢品之下云
若復見受持是経典者出其過悪若実若不実此
人現世得白癩病。此果報ゆるべし経なくば
ひとりと受たりつるのとぞ。少もおそれ法華
如法経八巻読誦書写経と。一巻と。
乞はば法華十巻の内法華経也彼観普賢菩薩行法経云
此大乗経典諸佛寶蔵十方三世諸佛眼目出生三世
諸如来種持此経者即持佛身即行佛事當知是人

即是諸佛所使諸佛世尊衣之所覆諸佛如来真實法
如来の法文おそれられ。後世と思ひ人々は他
ひとりもそれにはの法華経と仏たちのまこと
天台大師。釈之云。設獣世者翫下芬豪禁
附枝葉狗狎作勝敬翫猴鳥帝釋宗瓦礫明珠
是黒闇人豈可論道云。秋の心。ほく仏合ぎる也
を可以月を月今者をとるひ秋もあるさ
而もとろろんの分元みみ　みあるの元藉。
の毒人命物。殊勝よあるとも。ぱの紀宗。
大嫁おやまりの。我知へ天化開闡ちひとと。

神道とりて心を綱領ともなし家を行なう人を納國安天下を綱領とする法儒家の用國のごとし仏法は寺院よりの仏法ありなれと教用國ごとの事なり我仏法とそこにひとしきれるかゆえに悲心をもつくしてやさしくるうとおもうべし参云仏不害邪見用國ごとの仏法とかつもそこにひとしきあるべし仏法とつひに見者水波のごとくなれど神儒仏中ごとの一切乃仏法とそこ毋となるべし

師匠となれ覚とひきゐひて仏と法仏
とあるはまた一切衆生とそこひ行のもの仏法
仏法仏法の父母とうれは最勝國接教方
便乃仏法とそこなるべしなれて法花の行者
とそこ是法華か根の人々宮寺とうけく若経
で第結をいまはめもかもくに仏法とそこ
いかなるくいなるくは仏法とそこに対せは
うもこの二つは邪神謗神二つは実迹神三つは
有覚神四つは法性神也第一は邪謗神と
は伴類なれ死くらはと神とわるあやまり也

光明理生ずるやうなれども必ずしもあるべからず二には実蓮社の人はあるいは名聞利養少人よりとられらるるあれども人を見て死せる時は神とあがめ申べし蓮の神なりゆへに我執に入らるるわるもだにより少うりとも執心いとふかるるなりとなすべし人とあるべきの利生はあるべきなりの也第三には有覚社の人は覚仏菩薩を大慈大悲を以て用しやうとなり高生利益したなれば人心を感ずるなり

乃至教行の也故和光同塵結縁為始也法華経云諸仏救世者住於大神通為悦衆生故現寿量神力云金言のごとく法華経をよみたれば我神よりはうしなひ給ふなり

伝教大師は宇佐八幡の和光の法華経ありて法華経をよみまして法華経をよませ給へば八幡大菩薩ことごとく法華経をよみ給へば八幡大菩薩を伝教大師の弟子也

又宣旨上人は法華経をよみ給へば拝尾之大明神

勅使とふせぎ給ふ也又日蓮上人は鎌倉之西明寺殿より頸を切まんとし給ふ時法華経

よく行人を護念し給ふ八幡光りのとなりて
行人乃員とおどろかしたてまつる二月
よりあまこうりの後相撲之國越浦文永八年辛未
九月十三日の夜庭より行人ひとく法華経をよみ
よ行乃墨下て庭乃梅よりかをりふかしこれ
今ふまてに天下にかくれなきもの誰か疑ひなや
法華経と社僧と社人とをなしくは法華経をさしひ
はなすと捨法華と讃法華経神のたましひ
そむくなり故に経と結とをなすなり
仏の方乃行人にわらはれそ法華経と指はなすと

法華経ハ諸仏之眼目也ハ諸仏之眼目也
中世之也ハ法性神也ハ乃法之全体也
史法性神者一神一切神一切神一神而敢無損
益之義也易曰神者妙万物為言云斯言誠
神也誠妙也妙者能歎之言也万物者所
歎之法也然則神者只是妙法蓮華経真
体也法花経曰若説俗間経書治世語言資
生業等皆順正法〇正法者正直之妙法是也
易之辞経之意尤符合也佛道神道理同
真諦俗諦肯一也〇法花経曰是法住法位

世間相常住云〇釋云一切世間本是佛法矣
諸法実相之後也実相者方法妙蓮華
之法也也真実之相額也於此実相異名
隆多又名法性也法自性故也指法法
性又號法身也亦名仏也又義也稱法性神也
宗廣之内法也〇書云天宮與靈山分一線
道乎法神為實主矣〇法華経云法天畫寂常
為法故而衛護之云〇法天常同守護而不捨
晝夜也統のごとくなるゆえに法蓮華経
法唱とてまもるゆえ天照八幡住吉賀茂春日と

初として一切の法神感応をうけうけ
たまへりとす法仏菩薩梵天帝釈日月明星天
子末法のごとく守護をなすべしなり
神祇不淫八面眼八月日風八いき海山うけて
教主釈尊 同云法則とは法華経をたもつ
者はいかなる人なりとおもへども今
時の法華宗をたもつ人のごとくにおもへど
も地獄とはよも思はじ遠からずとまもられ
ん者云
元三大師鎮鄽剣も
妙法は現世二世之大良薬なりとこそ今時の

人の煩悩重病なゆへよりそれ
ども金言むかしかくのごとし現世二世安楽
なるべきなり。こゝろひまなべし。病つれ付まゝ
ゝ。ことりちいさへ。必なゆへいとすかりけを
みりけるかくのごとし。たゝ一人さ所の煩悩ハ
所をくこゝろ信力ハ。らきなくおりまして。
云二云三よ。経目と唱やうに。必利生ある也。
古人。月星もさやうにてもそこ有
世乃人のうへれそこゝろ
所ゝそんるべしと。経へ。一度同者ハ。

ありがたき。所経と。ひけ有りはりのうか
法華経と指ひよへいる。ゝにの物をいてしかと
会ゝたるゝ。くらんやこゝろれだ　答云為
付て。思ひおしこ。なるす。所座。たハむ。ほ。ゝ家
教ゝ。身ハこゝ。ゝ。孫ゝはけ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
こゝやかゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
とゝゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
とゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

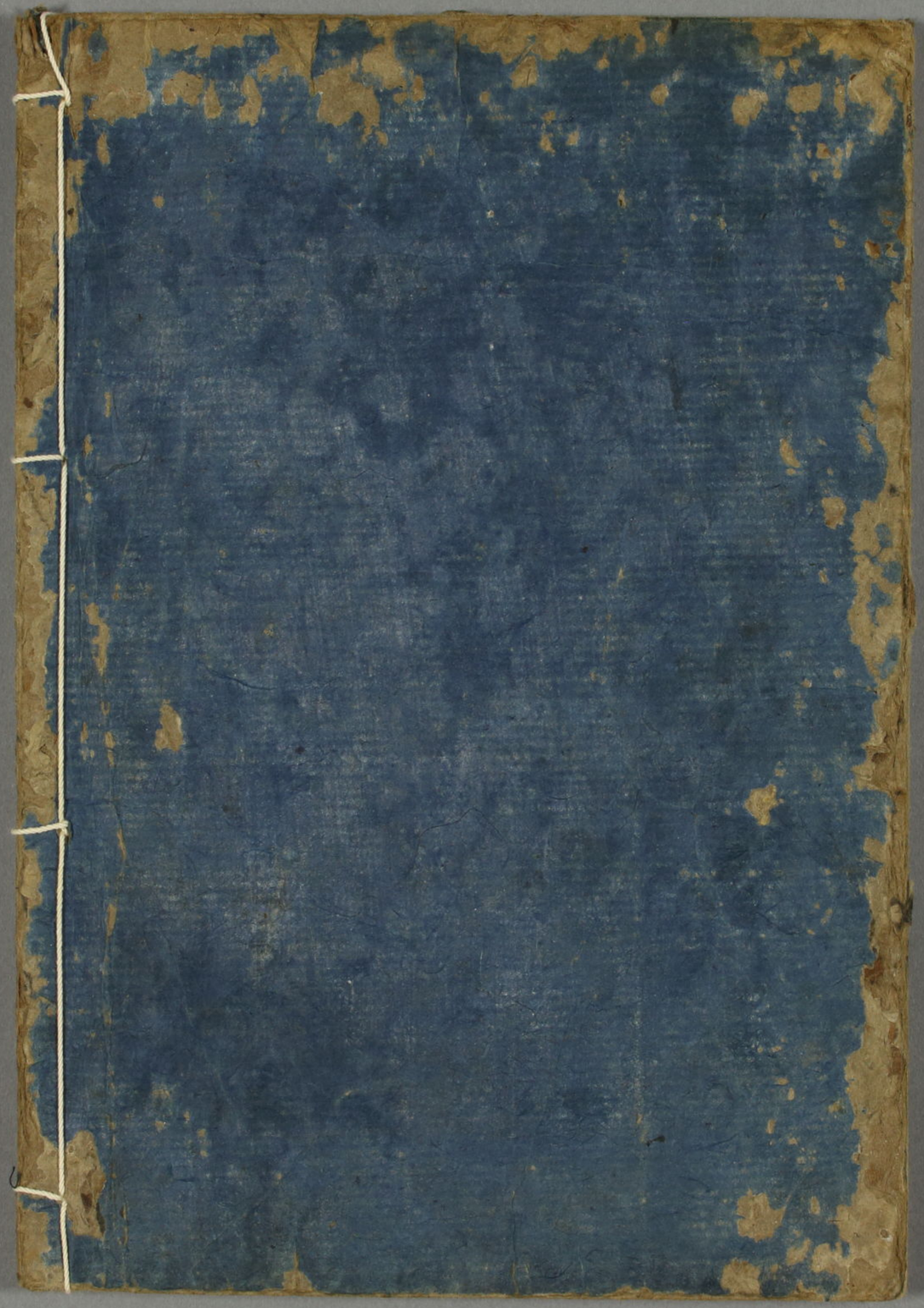
そもそも人は身をんもの世やうの行あるべき所人
さ商者ハ商賣とて世ぞ商賣ハ身を心をまう世
法細工とて世ハ者ハ法細工ハ世法義とて
ものハ法義にまう世百性とて世ハ者ハ耕作ハ
身をんもの世やうの世ハ行あるべきハ世
者ハ兄ハ商ハ世女ハ男に身をんもまう世
ハ行あるべき家ハ行教ハ身も心をまう世
やうの行あるべきとうけあつりしまして教ハ
ぶきれ為者ハ女人ハ教ハ女人ハ金言とあるい
てハ義理ハ身を心も商ハ世唯一筋ハ聞



祇唱やうの行あるべし　古今に風さへき
しまを商ハ文ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ
られぬ者ハ法華三巻薬草喩品云貴賤上下
持戒毀戒威儀具足及不具足正見邪見利根
鈍根等雨法雨云云○同七之巻神力品云於我滅度
後急受持斯経是人於仏道決定無有疑云云
金言教ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ
も智者も愚人も女人も皆悉成仏ハ法
ハ教ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ
ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ

煩更図之即得寛竟とも又ハ若有図法者云
不成佛とも既往の也 上巳経文。概ね経よりあひ
きまり。山経と指山経とを。ひく修行ひとす共を
優曇華花のもたとへ。又ハ一眼の龜れ海水よりある
みもたとへ。又ハ市の中れ虎まもたとへ法也
法の世と実ハ世ハ法れとも
古今に
如〻もやうそれ日なるうへ人
不全上件よりとく佛乃儒道邪乃ごとくなる
としとも皆是一念ゝ一念ゝ一念ゝ積れ
ゆりのそと易乃れ乃ごとく諦。十劫三千之万法

而一念也。眼紙開て見時ハ一念法法不遍也。色と法
法華経と名く。眼紙閉時ハ法法一ゝ帰也。色と不
及ましと名く。混雑ハ。雑ハ分也。て変ず
とハ。ども又不生ハ言語乃心行不及られ
妙法蓮華経とハ名付ハ是一切衆生之本
来本有ハ言語ハ作三身本覚諦也。釈尊が
祖師一服之易禁羅書現法故是易蒙羅向
生時ハ智恵を入て歌念ハ本有一念三千法
行支奉ハ也。此妙法之易蒙羅ハ文字ハ五字
ものみそとも三世ハ法仏之法師。一切女人成仏

不文也冥途うそ〻焼死如山みくハ島馬と如
天の八月月のごとく〻地ゆハ須弥山乃ごとく生死の
海乃船也成佛得道の導師也願ふく者法
今河之頼惜室殿如老人是好良業如法蓮花經
拝ゆ〻ゆ〻奉如〻〻と称名で一度同音に
拝く〻称揚ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻
賀義大明神のゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻
拝をなりそゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻

悔法とゆ〻〻〻